

館林キリスト教会 デポジションノート（2007年）

9月 1日 今日に通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 2：6～12
「父、母のように」

ここには「父のように、母のように」という比喻で、使徒と教会の関係を描いています。パウロは、テサロニケ伝道において救われた霊の子供たちに対し「母が子供を育てるように、やさしくふるまった」（7節）のです。それは、「自分のいのちまでもあなたがたに与えたい」（8節）ほどのものでした。神の愛に最も近い愛は、母の愛だとよく言われます。パウロはその母のような愛で彼らを導いていったのです。それと共に、テサロニケ教会の人々がよく承知しているように、「父がその子に対するように」（11節）彼らを導いていったのです。そこには父親のような威厳をもって、正しい道に導こうとするパウロの姿勢が表れています。ですから、神のみこころに添わないことは厳しく叱責をしたのです。教会は、こうした父と母のような、厳しさと優しさの中で養われていくのです。

9月 2日 今日に通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 2：13～20
「神の言」

ユダヤ人たちは、旧約時代には遣わされた預言者たちを迫害し殺し、やがて救い主キリストが地上においで下さったにもかかわらず十字架につけました。今もパウロたちを迫害し、救いの言葉を語るのを妨げているのです。テサロニケやベレヤでのユダヤ人の騒動と迫害が生々しく思い起こされます。しかし、テサロニケのある人々は、パウロの説いた福音の言葉を「神の言」として信じ受け入れたのです。確かに、事実、福音は神様が人間に啓示して下さった尊い救いの言葉です。御言が、聞いた彼らに、信仰によって結びつけられたのです。パウロは「この神の言は信じるあなたがたのうちに働いている」と真の神に仕える彼らを喜び、感謝を捧げています。パウロは苦難を遙かに越える喜びと誇りを抱いて「キリストの来臨の時、あなたがたこそ私たちの望み喜び冠です」と記しています。

9月 3日 今日に通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 3：1～10
「パウロの慰め」

パウロは、誕生したばかりのテサロニケ教会が、迫害と困難の中にある報告を聞きました。パウロは、彼らに対して信仰生活に艱難が伴うことを教えてありました。しかしやはり親心、いても立ってもいられない気持ちで、アテネ伝道をさておいて、愛弟子のテモテを遣わすことにしたのです。テモテの任務は言

葉と模範によってテサロニケのクリスチャンたちを支え、信仰を維持し、成長させることでした。パウロたちの祈りは、実際に助けを生み出す祈りとなっていたのです。テサロニケ教会についてのテモテの報告は、パウロを大いに喜ばせました。なぜならテモテがパウロに、教会は信仰と愛に踏み留まっており、困難にも挫けず、信仰に堅く立っていると知らせたからです。パウロは依然として伝道の困難の中にありましたが、彼らの信仰の姿勢によって慰めを受けたのです。

9月 4日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 3 : 11 ~ 4 : 8
「清い生活」

イスラエルの早春に咲くアーモンド（あめんどう）の花は桜に似ている相です。日本では、桜の季節が終わり新緑の美しい季節を迎えています。爛漫の桜、目の覚めるような新緑に誰でも感動します。私たちはまた、親切を受ければ心温まり、善い行いをすれば嬉しくなります。反対に喧嘩をすれば、その時スカッとしても、苦しいイヤな気持ちを抱え込むこととなります。私たちは何故このような心の動きをするのでしょうか。神様は愛であり、善であり、正しい方です。神様は私たち人間を神様にかたどって造りましたから、私たちは、神様がお造りになった自然界の花々や木々を喜び、感動するのです。親切を受ければ心温まり、善い行いをすれば嬉しく、罪を犯せば苦しむのです。そして神様は聖い方ですから、私たちは、清い生活に喜びと幸福があることを見出すのです。

9月 5日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 4 : 9 ~ 12
「再臨の備え」

テサロニケ教会のことを心配したパウロは弟子のテモテをテサロニケ教会に派遣しました。そのテモテが持ち帰った報告は、パウロに対する変わらない好意と、彼らが信仰に堅く立っているということでした。しかし気にかかる報告もありました。その一つが再臨に対する誤った考えです。テサロニケ教会のある人々は、主の再臨がすぐにでも来ると考え、働くことをやめ、日常生活のあらゆる仕事を放棄してしまっていたのです。パウロは、主の再臨に対するこのような誤った待望に対して、「落ち着いた生活をし、自分の仕事に身を入れ」（11節）で働くように命じたのです。主の再臨に対する最良の備えは、何か特別なことをするのではなく、日常のことを誠実に果たし続けることによるのです。

9月 6日 今日の通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 4 : 13 ~ 18
「主の再臨」

パウロは、私たちは主が十字架で死に、復活なされたことを信じているのだから、主を信じて亡くなった人々について心を痛めないでほしい、主が教えて下

さった真理をしっかりと心に留めていてほしいと語ります。主キリストの再臨に伴ってどのようなことが展開するのか続いて語っています。やがて主が天から来られる時、すなわち再臨の時、キリストにあって地上の生涯を終わった人々がまず第一によみがえります。それから、その時まで地上に生き残っている人たちと死からよみがえった人たちが、空中で主とお会いするために、一緒に雲の中に引き上げられます。こうして、主キリストにお会いした喜びと、互いの再会の喜びのうちに、永遠にわたって共にいるのです。なんとという希望に溢れた確信の言葉でしょうか。

9月 7日 今日に通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 5 : 1 ~ 11
「再臨の時期」

テサロニケ教会では、主キリストの約束された再臨の時期について、「主の日はすでに来た」とふれまわり、日常の仕事をなおざりにするような者が起こりました。また主の再臨に先立ってこの世を去った兄弟たちは、栄光と幸いにあずかれないのではないかといった不安と悲しみが彼らの間に起こりました。パウロはこのような間違いを正すと共に、キリストの再臨の時は、盗人のように突然来るが、神を信じる者は光の中を歩んでいるので不意に襲われる事はないと教えたのです。しかし再臨がいつ来ても大丈夫なように備えることは大事です。その備えとは、信仰の「目を覚まし、慎んでいる」ことで、それは「信仰と愛との胸当てを身につけ、救いの望みのかぶとをかぶって」武装する信仰生活の中に全うされていくのです。

9月 8日 今日に通読箇所 テサロニケ人への第一の手紙 5 : 12 ~ 28
「喜び、祈り、感謝」

パウロは第二次伝道旅行で最初のヨーロッパ大陸伝道に携わり、マケドニアのピリピやテサロニケに福音を携えて行きました。この手紙の「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。すべての事について、感謝しなさい」(16~18節)は有名なお言葉です。今パウロはコリントからこの手紙を書いています。少し前には伝道のためにピリピで投獄されました。鞭打ち、不当な投獄、足かせと鎖を掛けられたまま「パウロとシラスとは、神に祈り、さんびを歌いつづけた」(使徒行伝16章25節)のです。真夜中、突然の大地震で扉は全部開き囚人たちの鎖は解けてしまいましたが誰も逃げず、かえって、この時、獄吏と家族がキリストの救いに預かったのです。このように、パウロの一言に信仰と神様の恵みの事実が込められています。

9月 9日 今日の通読箇所 列王紀下 1章1～16

アハブが死んだのち、そのあとをついで、王子アハジヤが即位したことが、前章の終りに出ている。アハブの感化影響のもとに人となったアハジヤは、父王アハブの悪業を継承した。自分が病気になると、ペリシテの町エクロンのバアルの神殿に使者をつかわして、病気の回復を祈らせようとした。エリヤは神の命によってこの使者に会い、詰問したので、使者は王宮に引き返す。王は怒って兵隊を送ってエリヤを殺させようとしたが失敗した。そしてエリヤの宣告通り、その病気は回復せず、足かけ2年で、不名誉なその治世を終った。

9月10日 今日の通読箇所 列王紀下 2章1～8

「エリヤの別れ」

エリヤは地上の奉仕を終って、天に召される日が近いことをすでに悟っていたらしい。エリヤのこの「予感」は、エリヤが親しく霊的な指導と訓練に当たっていた、ベテル、エリコなどのいわゆる「預言者学校」の学生たちも、おのずから感ずるところとなり、学生たちは緊張していた。今エリヤは、決別のつもり各学校を巡回したが、一緒にいたエリシャを通して「決してさわぎ立ててはいけない。またエリヤのあとを慕って、ついて来るようなことがあってはいけない」と、かたくいましめたのである。しかしエリシャ自身は、エリヤを離れることなど、絶対にできなかった。エリヤの方でもまた、エリシャだけは、必ずしも拒絶しなかったらしい。

9月11日 今日の通読箇所 列王紀下 2章9～22

「霊の二つの分」

生きたまま昇天したケースが、旧約に記されているのは、エノクとエリヤの2人だ。しかしキリストの変貌の時、モーセとエリヤが姿をあらわしたのを見ると、モーセもまた、この2人に準ずる昇天をしたものと思われる。さてここでエリシャが、最後の最後までエリヤに従い、その不思議な昇天の様を見とどけ、一面エリヤもまたエリシャに対してそれを許したということは、およそ先生について物を学ぼうとする、弟子の模範である。それでこそ彼は、「エリヤの霊の二つの分」をうけて、その後継者となり得たのだ。

9月12日 今日の通読箇所 列王紀下 3章1～12

「モアブ遠征」

アハジヤ王の不名誉な死のあとその弟ヨラムがイスラエルの王となった。彼もさすがに、父王アハブ、兄王アハジヤの最後を見ては、神の裁きを恐れたらしく、バアルの石柱をのぞくなど、父や兄にくらべれば、幾分か善政を布いたと言える。しかしヤラベアムが設置した、ダンとベテルの金の子牛礼拝の神殿を、

取りのぞくまでには至らなかった。今、死海の東南にあるモアブが長年服従して来たイスラエルにそむいたので、イスラエル、ユダ、それからもっと南方のエドムの、3人の王が連合して、モアブを遠征しようとした。彼らは死海の南を迂回してモアブを攻撃する作戦に出たが、困ったことに飲料水がつかってしまった。

9月13日 今日に通読箇所 列王紀下 3章13～20

「祈りの予備隊」

この迂回作戦はそれなりのメリットもあったのだろうが、予定以上に時日をついやし、その結果飲料水が欠乏して補給の方法もなく、この作戦は失敗だった。しかし従軍していたエリシャは3人の王の懇望に答えて神に祈って、奇跡によって軍隊に水を供給し、戦争を勝利に導いたのである。どんなに周到に立てた作戦でも人間がやる以上、予期せぬ事態にぶつかれば、いつ失敗、危険におち入るかわからない。この軍隊の中に、敬虔なヨシャパテ王、預言者エリシャがいたことが、この場合の救いであったように、私たちにとっても、いつも「祈りの態勢」が必要だ。

9月14日 今日に通読箇所 列王紀下 3章21～27

「破壊作戦」

イスラエルとその連合軍は、この時徹底的な破壊作戦でモアブの町々を滅ぼした。命のつなの井戸を全部埋め、砂漠の中にほそぼそと仕立てた耕地や、まばらな林もつぶし、まるでもとの砂漠にしてしまったから、残ったのは地名だけのようなありさまだ。モアブが立てこもった最後の城を包囲すると、昔のことだから、まわり中から雨あられと石を打ちこんで攻撃する。くやしがりモアブ王が700人の決死隊を包囲軍に突入させたが、これも失敗に終わった。なかば狂気のようなになったモアブ王は、いよいよ玉砕のつもりで、その長男を人身御供にささげてその神に祈る。その恐しい様子が城壁の上に見える。これではキリがないので、イスラエルの人々のイヤ気がさして戦う気がなくなり、勝手に戦争を放棄して、みな自分の国に帰ってしまった。

9月15日 今日に通読箇所 列王紀下 4章1～10

「エリシャ先生」

これから預言者エリシャ先生の奉仕の話がいろいろある。エリシャは一方では、いわゆる「預言者学校」の校長だし、一方では、その学校を卒業して奉仕に当たっている「預言者のともがら」の指導者、責任者であった。今、清貧に甘んじながら忠実に奉仕して昇天した、1人の預言者の遺族の訴えに対して、奇跡をもって生活の必要をみたしてあげたのも、彼の責任者としての役目を果たし

たことだった。この話はまた、教会に聖霊がそそがれ、次第にすべての信徒が聖霊にみたまされていく、原理と秘訣を示す1つの型として、今も用いられている。

9月16日 今日に通読箇所 列王紀下 4章11～25

「休憩所の提供」

エリシャがシュネムに往復する途中に、この裕福な家族の家があったのだろう。ある日エリシャが通るのを見かけ、食事にでも招き入れたのがキッカケとなって、彼が通るたびに何かと接待するうち、いよいよエリシャに対する信頼、尊敬の念が深くなり、とうとう自由に宿泊もできるような一室を作って、エリシャに提供することになったのだろう。そのむくいとして、子供がいなくて淋しかったこの家庭に、神の祝福によって、子供が与えられることになったのである。「わが弟子たる故に一杯の水を惜しまない者には必ずむくいる」とおっしゃった、キリストのみ言葉も思い合わされる。

9月17日 今日に通読箇所 列王紀下 4章25～37

「日射病」

神様の祝福によって与えられたこの子供が、日射病か何かで突然死んでしまったので、急いでエリシャに知らせた。エリシャはすぐにやって来ると祈りによってこの子供を生かし、再び母親の手に渡したのである。これは一つの奇蹟であるが、それにしてもこの場合エリシャの祈りの、熱心と愛と、ねばりの姿には、本当に頭が下がる。話は違うが、我々の伝道によって人が救われるのも一つの奇蹟である事を思えば、祈りにおいて愛のおいて、努力において忍耐において、我々もエリシャのようでありたいと、切に願うのである。

9月18日 今日に通読箇所 列王紀下 4章38～44

「昔の聖書学院」

どんなに良い生徒でも、学生というものは先生に世話を焼かせるものだ。そのころの「預言者のともがら」すなわち聖書学院で、ある時ひとりのおっちょこちょいの食事当番の学生のために、危く全生徒が食中毒で死ぬところだった。一人の生徒が悲鳴をあげたので、エリシャが祈って、何かの粉をまぜたら、食べられるようになった。これも奇蹟かもしれないし、あるいはエリシャが何か、解毒剤、あるいは中和剤をまぜたのかも知れない。次に後援者の一人がごちそうを寄付してくれたが、せっかくのごちそうも全員が食べるにはどうにも足りないのか、かえって気がもめる有様だった。しかしエリシャの言葉どおりに皆で食べたら、全員満足してなお余りが出た。これも奇蹟かも知れない。あるいはそういう食べ方もあるかも知れない。今の聖書学院にも、これと似たような

話があるかどうか。

9月19日 今日の通読箇所 列王紀下 5章1～14

「ライ病の將軍」

ライ病は昔から、罪の型として取りあつかわれている。潜伏期がある、だんだん体がくさってゆく、伝染する、不治の病だ、などと言われていたのが、罪と共通点があるからだろう。今、スリヤの將軍ナアマンが、この恐い病気から奇跡的にいやされた、そのプロセスの中に、我々は罪からの救いのプロセスを学ぶことができるのである。ここに捕虜としてナアマンの家に仕える、不遇にして可憐な一少女の、感化力をともなった証、進言がある。ナアマンはこれに期待して出発した、つまり彼の心と行為による応答がある。彼が通らなければならぬ意外な経験。そして学ばせられた、謙遜と神の言葉に対する従順など。我々も同じようにしてキリストの十字架の血潮をうける時、恐い罪と滅びからの救いを、経験することができる。

9月20日 今日の通読箇所 列王紀下 5章15～27

「慾ばりゲハジ」

エリシャは主の伯として、もともと清貧に甘んじていた。その弟子ゲハジと同様であったろう。しかしナアマンが莫大な謝礼を提供しようとした時、エリシャの眼はくらまなかったが、ゲハジの眼はくらんだ。誰にも「ちょっとした口のきき様で大金が入る」というようなチャンスはあるもので、ゲハジは良心にそむいて、このチャンスを利用したのだ。しかしこの大金は、実は罪と抱き合わせだった。大金をつかんだ結果、ゲハジにはライ病が生じたのだ。人の心のスキをうかがう、悪魔の誘惑は恐い。「金銭を愛することは、すべての悪の根である。すべての悪の根源である。ある人々は慾ばって金銭を求めたため、信仰から迷い出た」テモテ第一、6章10節

9月21日 今日の通読箇所 列王紀下 6章1～7

「学院増築」

聖書学院がせまくて不便になって来たから、増築をすることになった。皆で山に行って材木を取って来て、手造りでやろうということで、しかも材木を切り出すおのやその他の道具も、学院に好意を持つ人から借りて来るなど、昔の学院の質朴な様子がしのばれる。しかし、素人仕事というものは、さわぎの割にはうまくゆかないもので、誰かがおのの頭のはまり工合もたしかめないで、力まかせに木を切り倒そうとすると、木は切れないで、かえっておのの頭が飛んで、しかも水の中に沈んでしまった。そこで例の如く「エリシャ先生何とかして下さい」ということになる。エリシャがこの時取った方法は奇跡なのか、そ

れともそういうやりかたがあるのか、よくわからない。それにしてもエリシャはやさしく、面倒のよい先生だと、つくづく思う。牧師もそうありがたい。そうでなければ人は育たない。と共に、いつも我々の失敗を深くとがめず、かえって愛と恵をもって取りあつかって下さる、我々の「信仰の導き手である、また完成者である。イエス」のことが思われる。

9月22日 今日に通読箇所 列王紀下 6章8～19

「火の馬火の戦車」

家庭でも教会でも国家でも、真剣に祈る人がいる場合、神様は彼の祈りに答えて、家庭を守り、教会を守り、国を守り、つねに助けと祝福を与えて下さるのである。エリシャの祈りの奉仕は、尊いものと言わなければならない。今、エリシャの召使いは、彼らの家を包囲した、スリヤの大軍を恐れた。しかしエリシャが祈って彼の眼を用いた時彼は、彼らを守るために野山にみちた神の軍隊、火の馬と火の戦車の大軍をあきらかにみる事ができた。いつの場合でもクリスチャンにとって「われわれと共にいる者は、彼らと共にいる者よりも多い」のである。

9月23日 今日に通読箇所 列王紀下 6章24～33

「サマリヤ攻囲軍」

王様、政府、軍隊などは、もともと社会秩序の維持、外敵からの保護、国民生活の安定などのために立てられているものだが、これらの大切な責任は、神の助けなしには果たしてゆくことができない。それ故にすべての責任者たる者、平素からへり下って神に祈るべきであるのに、ともすれば、それに気がつかないで、いばることやぜいたくばかりでいそがしい。今ここにスリヤ軍の包囲攻撃下のサマリヤ王は、ふだんの不心得がたたって、全く神の保護も助けも得られず、国民が餓えようが、悪事を行おうが、何の手も打てない、言わば破産的状态をさらけ出している。

9月24日 今日に通読箇所 列王紀下 7章1～8

「四人のこじき」

長期にわたるシリヤ軍の包囲攻撃のため、サマリヤ城内は飢餓状態で、王様はじめ市民全体が混乱と絶望におち入っている中で、四人のライ病のこじきが、まことに落ちついた態度で、自分たちの生きのびる可能性を検討した。このままここに止まること、町の中で食物を求めること、逆にスリヤ人の陣営に逃げてゆくこと。いまなし得る三つの事の中で、二つは即、そのまま死につながるが、最後の奇想天外な道は、二分の一の生きる可能性を含んでいる。なぜなら、スリヤ兵もライ病のこじきなどは殺さないかも知れないからだ。彼らはそれを

やってみた。そして凄い幸運にぶつかり、その結果ひいてはサマリヤも救われることになったのだ。われわれも絶望したり嘆いたり、いわゆる精神のカラまわりをしていないで、あくまでも神を信じて最後までやって見ることだ。

9月25日 今日に通読箇所 列王紀下 7章9～20

「救いのニュース」

こじきたちが幸運にも、食物と富にありついた頃、サマリヤはまだ飢えと滅びに直面していた。彼らは「われわれのしていることは良くない。黙って自分だけ幸運にありついて、サマリヤを見殺しにすれば、罰をこうむるであろう」と言って「スリヤ軍はすでに逃走してしまった」というニュースをサマリヤに知らせるために立ち上ったのである。これはさきにキリストの救いを経験した、クリスチャンの責任と似ている。それにしても、サマリヤが救われたのが、王や将軍の力でなく、「軽んじられて無きにひとしい」ライ病のこじきによったのは、ゆかいでもあり、また暗示的なできごとでもある。

9月26日 今日に通読箇所 列王紀下 8章1～6

「女の訴訟」

飢饉を避けて七年間、外国住まいをしていた婦人が、帰郷してみると、留守の間に家も畑も、人に取られてしまっていた。これを取りもどすためには王に訴え、今日で言えば裁判をしなければならぬ。しかしもともと裁判は面倒なものだ。まして昔のことだから、なかなか取り上げてもらえず、女の場合などは、結局泣き寝入りに終ることも多かったろう。しかしこの場合は、丁度王様がゲハジに、エリシャの奉仕についていろいろ聞いているところに、女の訴訟が届いた。しかもこの女がよくエリシャに奉仕したこと、エリシャもまたこの女のために、一度死んだ子供をよみがえらせた話などを、ちょうどしていた所だったので、すぐこの女の訴訟はよい結果をみた。これは神の摂理であり、またこの女の預言者に対する奉仕の報いと言うほかない。

9月27日 今日に通読箇所 列王紀下 8章7～19

「刑罰の器」

アハブ、イゼベルらの影響を、きれいにぬぐい去ることはむずかしく、イスラエルは次第に、宗教的、道徳的に低下をつづけ、政治的軍事的にも混乱し、終末、亡国の運命に近づいて行く。今、病氣療養中のスリヤ王は、側近の有力者ハザエルに、多くの贈物を持たせ、自分にかわってエリシャを訪問させた。丁度エリシャはダマスコに来ていたのである。王は自分の病気のなりゆきをエリシャに問わせたのだ。エリシャはハザエルの野心を見抜いて「あなたは王となるだろう」と預言した。そしてその顔を見つめて泣いた。ハザエルは結局

スリヤ王を暗殺して王となるが、やがて彼は、神の祝福を失ったイスラエルに侵入して、イスラエルに対する神の裁きを執行する器となる。即ち多くの残虐行為を行うのである。エリシャはそれをも予知した故に泣いたのだ。

9月28日 今日に通読箇所 列王紀下 8章20～29

「悪影響」

南国王ユダの王ヨラムは、敬虔だったヨシャパテ王の王子であったが、イゼベルの娘を妻としていたので、イゼベルの影響は次第にユダにまで及んで来たのである。ここでも宗教と道徳の混乱が、政治軍事の混乱を招いていた。そして混乱している国は外国にあなどられるのである。従来はユダの属国だったエドムやリブナが、今ユダに反抗して独立してゆくのもそのためである。ヨラム王はこの勢いを食い止めようと、エドムに攻めこんだが、かえって包囲され、命からがら逃げ帰るありさまだった。結局彼は失意のうちに死んだ。

9月29日 今日に通読箇所 列王紀下 9章1～16

「クーデター」

アハブ王の子、現イスラエル王ヨラムは、スリアとの戦争で負傷して、エズレルの別荘で傷を養うことになり、ラモテ・ギレアデに出征中の現地軍の指揮は、将軍エヒウにまかされた。エリシャの命令によってつかわされた一人の弟子は、丁度作戦会議中の将軍エヒウに会うと、油そそいで彼をイスラエル王とし、アハブ王家一族ことにイゼベルを罰するように命じた。イゼベルのような人は、生きている限り暗躍を止めない。しかもアハブ王家はすでに人望を失い、国中に革命、革命の機運がみなぎり、将軍エヒウはもともとそのリーダーだったのだ。軍人たちはすぐエヒウを立てて王とし、このクーデターを成功させるために、すぐにアハブ王家一族を殺そうと、すぐにエズレルに向って進軍する。

9月30日 今日に通読箇所 列王紀下 9章17～37

「イゼベルの死」

将軍エヒウの行動は、迅速果敢だ。エズレルで静養中だったイスラエル王ヨラムは、変だとは思いながらエヒウを出むかえたが、丁度ナボテのぶどう畑だった場所で疾風のように馬車を飛ばして来るエヒウを見ると、反乱に気がついて逃げようとするところを射殺された。状況を悟ったイゼベルは、くそ落ちつきに落ちついて、ゆっくりお化粧を仕上げ、城の窓から首を出すと、エヒウに向ってイヤ味な毒舌を吐いたが、そこから投げおとされて墜落死をとげ、次にエヒウの馬車にひかれ、エヒウが食事をする間放置された彼女の体は、最後に犬に食われた。